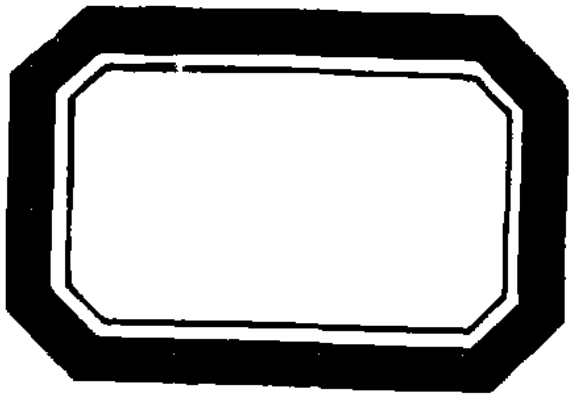
池宮彰一郎
事変
リットン報告書ヲ
奪取セヨ
新潮文庫



事変

—リットン報告書ヲ奪取セヨ—

新潮文庫　い-46-2

平成七年十二月一日発行

著者　池宮彰一郎

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社新潮社

郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部(〇三)三二六六—五四四〇
読者係(〇三)三二六六—五一一一
振替　〇〇一四〇—五—八〇八

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・凸版印刷株式会社　製本・株式会社大進堂

© Shôichirô Ikemiya 1982　Printed in Japan

ISBN4-10-140812-2 C0193

新潮文庫

事変

—リットン報告書ヲ奪取セヨ—

池宮彰一郎著

新潮社版

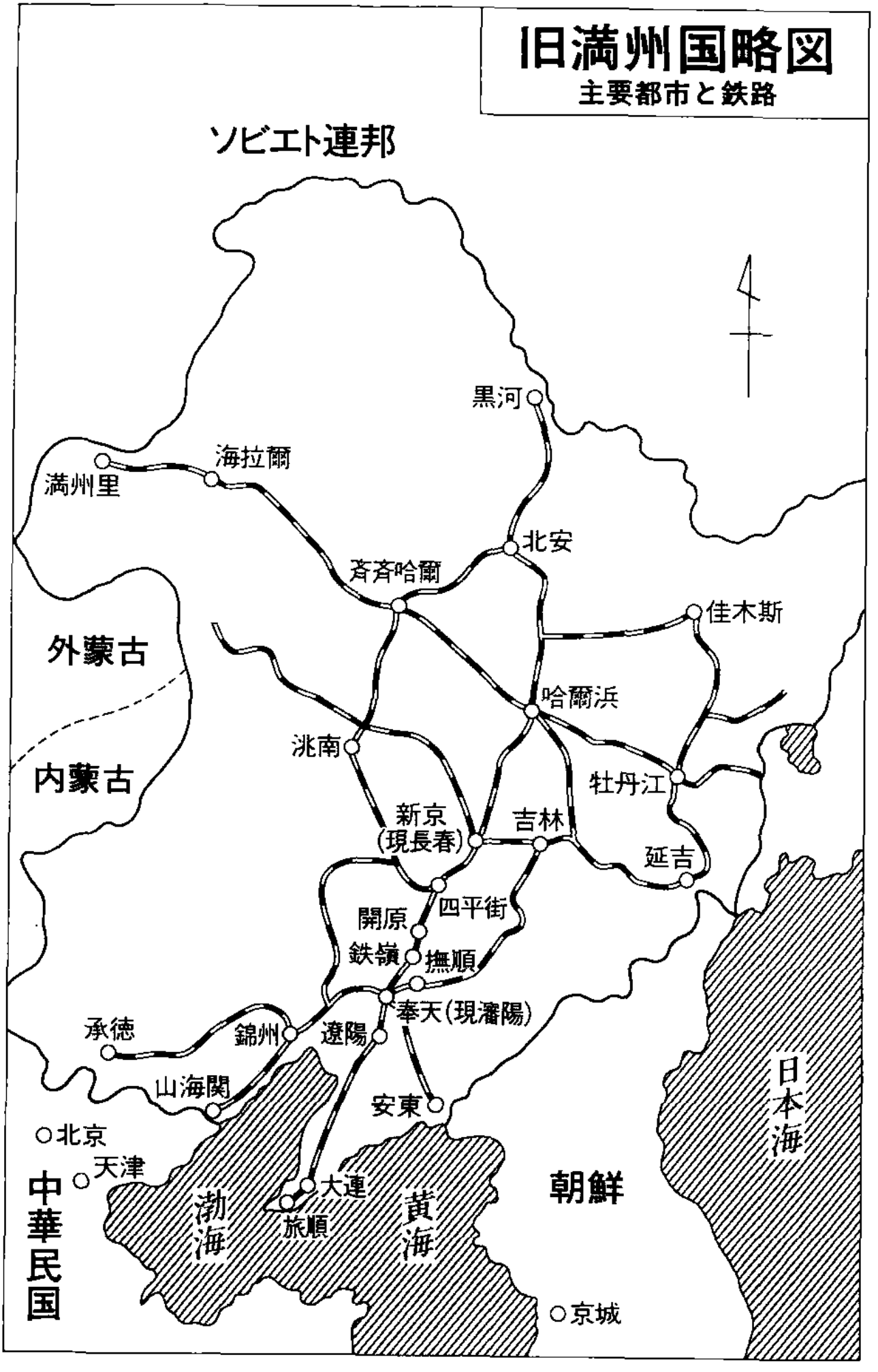
目次

プロローグ1・2……七
一章　暴走……一九
二章　計画……九一
三章　実行……一六五
四章　成功……二一九
五章　密約……二七五
六章　破局……三三一
エピローグ1・2……三七三
あとがき……三八九
解説　半藤一利

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

事　変

―リットン報告書ヲ奪取セヨ―


旧満州国略図
主要都市と鉄路
ソビエト連邦
黒河
海拉爾
満州里
北安
斉斉哈爾
佳木斯
外蒙古
哈爾浜
内蒙古
洮南
牡丹江
新京
(現長春)
吉林
延吉
四平街
開原
鉄嶺
撫順
奉天(現瀋陽)
承徳
錦州
遼陽
山海関
安東
北京
天津
大連
旅順
渤海
黄海
朝鮮
日本海
中華民国
京城

プロローグ1

箱根山を西に越えた静岡県の東部に、沼津市という地方都市がある。

私（筆者）は、その沼津市で、数え歳三歳から十八歳までの十五年間を育った。

戦後、どういう理由か下田に移されたが、沼津には明治以来久しく御用邸があった。明治時代、東京近郊の土地の気象を調査して、もっとも温暖の地として選んだといわれている。北に富士山をいただき、南は駿河湾に臨み、風光にも恵まれていた。

昭和八年五月初めのある日のことである。当時、小学生だった私は、教師に引率されて沼津駅へ赴いた。

その頃、沼津御用邸には皇太后陛下（貞明皇后）が御滞在中だった。行幸・行啓のたびに、御送迎に堵列するのが、沼津の小・中学生の重要な行事だった。それとともに、天皇御一家や皇族方の御滞在中、内外の重要人物が拝謁・伺候のために訪れる、その歓送迎にも赴いた。

その日、皇太后陛下に、帰朝の挨拶に訪れた人物があった。先ごろスイスのジュネーブで開かれた国際連盟総会に、大日本帝国首席代表として赴いた特命全権大使、松岡洋右であった。

朝から雨だった、という記憶がある。当時の小学生は、傘を差さず、雨合羽を着用してい

た。木綿地にゴム引きの、にぶい青灰色の合羽だった。通気性がまったくないくせに防水が完全でなく、裏地にすぐ雨水がしみ通った。頭巾を伝う雨滴は襟もとに落ちて首筋を濡らし、裾から流れる雨水はゴム長靴に入って裸足の足裏にたまる。子ども心に雨の日はうっとうしかった。

行幸啓や皇族方のお出迎えは、全校を挙げて沿道に堵列するが、政・官界の重要人物はそれほどでなく、選ばれた学年の者が到着ホームに列車を迎えることになっていた。

その日、私たちの学年が駅へ出向いたのは偶然のめぐり合わせだった。さらに、私の並んだ位置は一等車の停車位置の真ん前だったことも偶然であった。

列車は、下り特急「つばめ」だった。東京発午前九時。その頃はまだ、記録破りの難工事だった丹那トンネルが完成に至らず、東海道本線は箱根山を迂回する急勾配の御殿場廻りで運行していた。もちろん蒸気機関車である。

正午少し前、列車は沼津駅の下り一番ホームに辷りこんだ。一等車の昇降口附近には、大勢の出迎え官民が群がっていた。市長、地方事務所長、警察署長、帝室林野局支所長、県立病院長、三島の野戦重砲兵旅団長……。

その人垣の中へ、すでに新聞写真で馴染み深い松岡洋右が降り立った。太いロイド眼鏡、黒々としたスターリン髭、意外に短軀だったように記憶している。それと赤ら顔が印象的だった。まるで微醺をおびているように見えた。

低く垂れこめた雨雲に、昼花火が響きわたった。それを合図に怒濤のような万歳の歓声が

起こった。私たちは声を限りに叫んだ。

「松岡全権、万歳！」

「国際連盟脱退、万歳！」

二年前、昭和六年九月十八日に起こった満州事変は、日本軍の赫々たる勝利に終わった。その成果として大陸の一角に、日本の二倍の領土を持つ盟邦〝満州国〟が誕生し、日本の保護下に豊かな資源を提供することになった。

だが、欧米各国はこぞって日本を非難した。世界最初の国際平和機構である国際連盟は、日本が満州を不法に武力侵略したと断定する現地調査報告と、満州の状態を事変前に回復するよう求める勧告案を、四十二対一の圧倒的多数で採択した。

その国際連盟総会に、日本の首席代表として出席した松岡洋右は、決然起って四十五分間にわたる連盟訣別演説を英語で行ない、日本を非難し続けた各国代表にさえ多大の感銘を与え、堂々と議場を去った。

その結果、日本は昭和八年三月二十七日、正式に国際連盟脱退を宣言し、〝名誉ある孤立〟へ第一歩を踏み出した。

戦勝に意気あがる日本国民は、欧米の圧迫にひるむことなく、敢然と孤立の道を選んだ松岡洋右の決断と勇気に賞賛の拍手を送り、国民的英雄として彼の帰朝を迎えた。

国際連盟脱退宣言から一カ月後の四月二十七日、米国を経て横浜に帰った松岡は、熱狂的な歓迎を受けた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

その松岡洋右を、いまここ沼津に迎える。
笑顔で帽子を上げてこたえるだろう。全世界の視聴を集めた国際会議場での名演説の一端を披露するかもしれない。
そうした期待を、松岡洋右は、再び上がった昼花火を見上げて言った。
「やめていただこう」
低音だが、よく透る声だった。
松岡は、一瞬立ちすくんだ出迎えの人たちを尻目に、私たち学童の前に歩を進めた。彼が足を止めたのは、ちょうど私の前だった。
「……勝って帰ってきたわけではない」
息を呑んで見守っている人々は、その言葉に衝撃を受けたようだった。
私は、胸の鼓動が早鐘を撞くように鳴るのを感じながら、眼前にその人を見つめていた。
間近に立った松岡洋右から、車中の暖房のせいか温かい乾いた空気と、その空気にまじるオーデコロンの香りが伝わってきた。
「いつか……きみらにもわかる日がくる。いまはわからんだろうが……きっとわかる」
そう脈絡もなく呟くと、松岡は、私の、濡れた雨合羽の肩を摑んだ。
「たいへんな時代だぞ、頑張るんだ」
何を頑張れというのか、意味もわからず、私はただ夢中でうなずいた。
「閣下……」

出迎えの中から声をかけた者があった。

松岡は、私の肩に手を置いたまま、見返った。

「……興津へお寄りになりますでしょうか、警備の都合がありますので……」

興津――。当時の者なら小学生でも意味は通じた。沼津から西へ十里（四十キロメートル）足らず、静岡よりはすこし手前のその町に、〝坐漁荘〟がある。国家の最高元老、西園寺公爵の私邸である。

西園寺公望は、明治・大正・昭和期の貴族政治家で、明治維新に参与し、明治三年フランスに留学、伊藤博文に従って憲法調査に加わり、外交官生活を経て政界に入る。枢密顧問官、貴族院副議長を歴任、文相・外相、枢密院議長に就任後、第一次・第二次内閣を組織、詔勅を得て元老に列した。その後は、政変のたびに後継内閣の首班を選んで、天皇に奏請する地位にあり、重要国事を担当した者は例外なく報告に赴く。

松岡は、国際連盟脱退という枢要な国事に与ったにもかかわらず、帰朝以来、西園寺の許に赴いた形跡はない。彼はいま、故郷の山口県三田尻（現、防府市）へ帰る途中である。問うまでもなく松岡は、皇太后陛下への拝謁を済ませた後は、当然、興津の西園寺邸を訪れるものと、誰もが思っていた。

だが、松岡の返事は、再び予想を裏切った。

「興津？」

彼はゆっくりと首を横に振った。

「まっすぐ……郷里(くに)へ帰ります」

何かおぞましいものでも振り払うかのように、私の肩から掌を離し、さっさと歩きはじめた。

人々は、あわてて彼に続いた。

小柄(こがら)なその後ろ姿は、すぐ人波に隠れて見えなくなった。

雨は一段と激しくなっていた。

プロローグ2

松岡洋右と会ってから十年の歳月が過ぎた。

世界は、激動していた。イタリアはエチオピア戦争を起こし、アフリカ唯一の独立国であったエチオピアを併合した。スペインではフランコが反乱を起こし、三年にわたる内戦の末、左派人民戦線政府を倒して、独裁政権を樹立した。ナチス・ドイツは再軍備を強行し、第一次大戦で失ったヨーロッパ領土を次々と奪還、オーストリアを併合した。そしてさらに、ポーランドを侵略した。英・仏がドイツに宣戦し、第二次大戦が始まった。

日本も例外ではなかった。昭和十二年七月、日中戦争が始まり、昭和十六年十二月、米英に宣戦布告して、太平洋戦争に突入した。

十年前、沼津の小学生だった私は、昭和十六年四月、満州へ渡り昭和十八年十月、二十歳で現地徴集を受け、軍隊に入った。

入隊前の二年半の間に、私は中国人と親交をもった。それを奉天憲兵分隊に咎められ、検束されたことがあった。そういう〝前科〟を持つ私は、入隊後、ただちに〈要注意兵〉として露骨に目をつけられた。

私は、反抗した。たちまちのうちに、〝関東軍元帥〟と仇名されるほどの札付きとなった。

私が、向地斥候を命ぜられたのは、けだし当然だった。

そのころ、東満国境でソ連軍と対峙する部隊では、〈向地斥候〉と名づけた隠密行動がしばしば実施された。近い将来の戦闘に備えて、国境の向地――すなわちソ連領へひそかに越境し、相手方の配備を偵察しようというのである。

一触即発の国境地帯だ。相手方は厳戒態勢で網の目を張っている。その真只中へ七、八人で入りこむのである。無事に帰れると思うほうがあまい。

発見されれば銃火を浴びせられる。不法越境だから文句なしである。相手のソ連はまだ敵ではないから、そこで死んでも戦死にはならない。行方不明者として処理される。もちろん功績名簿に記載されることはない。

こういう任務は、軍隊の持て余し者にかぎる。私は四回選抜されて、ソ連領シベリアの土を踏んだ。そのうち、全員無事に帰還したのは一回だけだった。

なにしろ、斥候隊は全員、地理からして不案内だった。道案内に立って、見知らぬ男が同行したのは、二回目の時だった。年の頃は四十前後、人相風体からみて現地人（満人）の密偵らしかった。男は林の中の国境線まで私たちを案内すると、闇の中に姿を消した。

そのときの斥候隊の目的は国境から十キロほど奥にある鉄橋の偵察だったが、鉄橋の架かった川に辿り着くより早く発見され、さんざんに銃火を浴びた。斥候たちは四散し、八方へ逃げた。個々に逃げて運のいい者だけが帰還する。そういう取決めだった。

私は、夜っぴて荒地を走って逃げた。逃げる方角は東北東、国境線と平行していた。

夜明け方、名も知れぬ高地に辿りついたとき、前夜、国境線で別れた道案内が現れた。

彼は、斥候隊の任務失敗を予想して、独断で国境を越え、様子を見にきたという。言葉を交わしてみると彼は現地人ではなかった。まぎれもない日本人だった。

「それで、あとの者はどうなりました」

「五人までは確認した。三人と二人がそれぞれ組になって国境線に向かったがね、ロスケ（ソ連兵）の包囲網に引っかかって殲滅された」

ソ連軍は、斥候隊に選ばれた下級将校や兵隊が、大した情報を持っていないことを知っていた。そのため越境した斥候隊には容赦なく銃火を見舞う。

「残りの二人は……」

「わからん、方角を間違えて奥地へ向かったのだろう。どこかで警戒線に引っかかる。時間の問題だな」

彼は、越境者の逃げ方を解説してくれた。彼の言によると、国境線へ直行するのが一番危険だという。相手方は包囲網を設けて待ち構えているからだ。

そうかと言って、奥地へ向かうのも駄目だという。人や車の往来が激しい上に隠れる場所が乏しい。夜が明ければ九分九厘見つかってしまう。

「国境線から十キロ以内は無人地帯だ。その範囲内で北上するか南下するしかない。できるだけ遠ざかって非常警戒態勢の解けるのを待つんだ」

「すると、当分帰れない……？」

「なあに、非常警戒はそう長くは続かん。発見現場から二、三十キロ遠ざかれば、一週間以

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com